

ホームシアターにおける 日本的なるもの

6月末に六本木にあるAXISビルにオープンしたばかりのNEXT SCENEを
インテリアデザイナーの内田繁氏が訪れました。
2年以上の間、日本の住環境に対応したホームシアターの在り方を追求してきた
NEXTオーナーの加藤洋一氏の想いが詰め込まれたホームシアターを、
デザインにおける日本的なるものを追求してきた内田氏が体感しました。

撮影 編集部 写真 林 久光

リビングシアター自体が
日本的なる空間である

加藤氏の案内で、まずは内田氏
にAXISビル2階バンク&オル
フセン六本木のホームシアターを
体感していただく。リビングシア
ターの提唱者である加藤氏の、こ
れまでの集大成ともいえるリビ
ングシアターである。次いで、AX
ISビル4階NEXT SCENE
Eのホームシアタールームを体感
していただく。音と映像を堪能す
ることだけを目的につくられた究
極のホームシアタールームであ
り、ブラッックルームと呼ばれる
暗闇に覆われた空間だ。

両者を体感していただいた後
NEXT SCENEのミーティ
ングルームで対談ははじまった。

——ホームシアターは、映画館の

ミニチュアみたいなスタイルが北
米で発達してきました。それが日
本に入ってきてだいぶスタイルが
異なってきたんじゃないかと思
います。まず2階でリビングシア
ターを体感していただきましたが、
実は加藤さんはリビングシアター
の提唱者です。このリビングシア
ターというスタイル自体が、わた
しは極めて日本的なスタイルだと

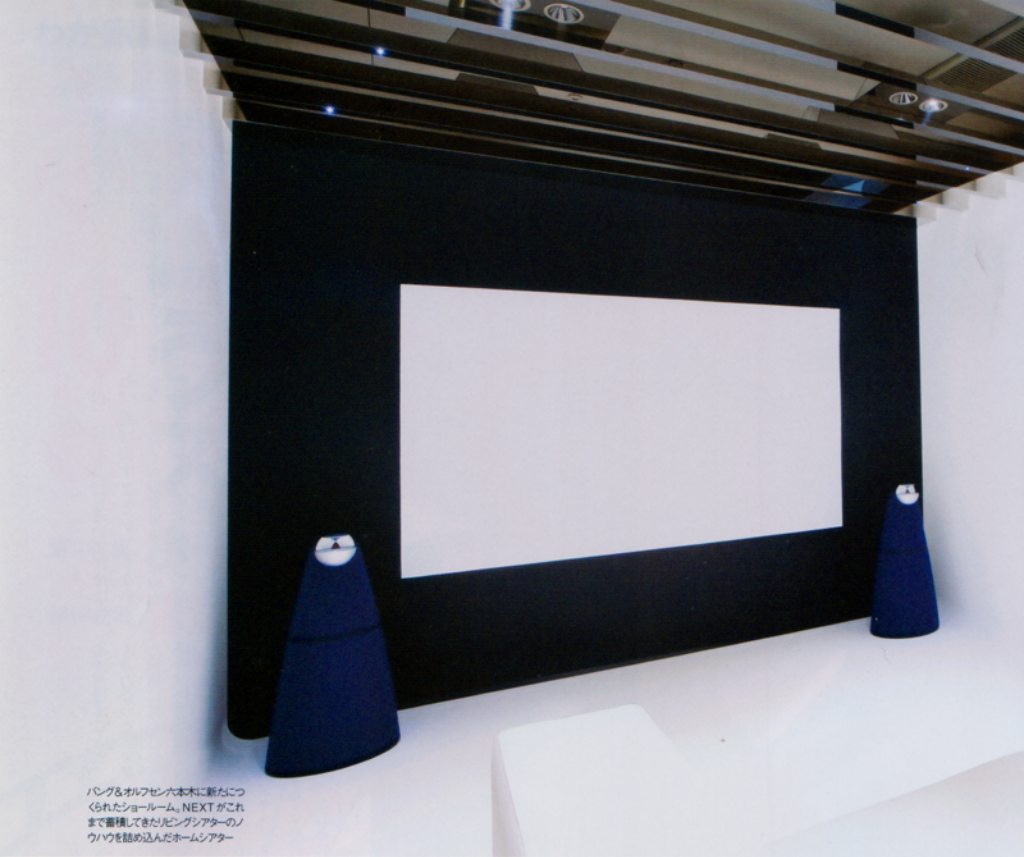
思います…。

内田 北米では映画を観るという
行為は日常とつながっていると思
いますが、しかし映画が生活空間
に入ってくるということはあまり
ないんでしょうね。というの、も
欧米は機能で空間を分けてしま
う、分散化した空間の使い方をす
るんです。だから、映画を観るな
ら映画館か、それ専用の部屋とい
う発想でしょう。

加藤 最初は別に日本的な空間を
意識していたわけではないんで
す。日本の住宅の中で物理的に広
い面積がとれるのはリビングなの
で、じゃあリビングでやろうと。
——でも、それが実はむしろに
日本的な空間意識につながって
いたわけですね。内田先生がおし
やっている日本の空間の特質、
「空(カウツ)」に関係しているんじ
やないか…。

内田 そうですね。日本の芸能と
いうのは、その歴史を見ると、能
にしても、茶の湯にしても、室内
芸能として出発しています。能舞
台ができるのはずっと後、室町時
代も中期を過ぎてからです。室内
で能をケストといつしよに楽し
む、そんなところから出発してい
るんです。

室内芸能が可能になったのは、



パング&オルフェン六本木に新たに
 くれたショールーム。NEXTがこれ
 まで蓄積してきたリビングシアターの
 ウソワを詰め込んだホームシアター

日本の室内空間が自由に使えると
 いうことが基本にあるからです。
 いま、君が言った空(ウツ)とい
 う言葉ね、これは空っぽというこ
 となんです。空っぽだからこそ、
 多様に何にでも使える。踊りも能
 もお茶も何でも楽しめる。畳の敷
 き方によって、家の中を自在に変
 化させるわけです。食事もすれば、
 ゲストも招けるし、芸能も業
 しめる。寝室にもなる。ウツだか
 らこそ何にでも変われます。

日本におけるリビングというの
 はそういう存在なんだと思いま
 す。だから、リビングシアターと
 いうのは、極めて日本的なる空間
 なんです。

加藤 そこまでは考えていません
 でした。単純に住宅の中で物理的
 に広い空間ということでリビング
 を使おうと考えました。その時
 に、機材が昔は大きかったですか
 ら、どう処理しようかと。まずは
 それを考えて、次にスケール感を
 出すためにスクリーンを使おう
 と。じゃあ、どこにスクリーンを
 置けばいいのか考えて、たどり着
 いたのが窓際に置いて、普段の生
 活の中からは消し去ってしまうと
 いう(パング&オルフェン六本木
 で使っている)手法です。

内田 あの手法の処理は見

事ですね。何にでも使える空間を
 自在に変化させるときに重要な
 のは、ディテールなんです。ホー
 ムシアターは映像が映ればいいん
 だ、というわけではなく、映らな
 いときにどうなっているのが重
 要なんです。

**ホリゾントをなくして
 空間感覚を消し去る**

—では、今度は4階の通称ブラ
 ックルーム「暗闇のホームシアタ
 ー」です。専用室とはいえ、映画館
 のミニチュアとは全くの別物にな
 っています。

内田 ここ(ブラックルーム)は
 異界なんです。まさに向こうの世
 界(入り口を指差して)ここ、に
 じり口というか、芝居小屋の鼠小
 戸ですよ。大きな道から芝居小



内田 繁氏
 philenumber.024
 世界的に有名なインテリアデザイナー、インテリアにとどまらず、建築、都市計画、プロダクトまで手がける。銀座銀座など、受賞多数。メトロポリタン美術館をはじめ世界の美術館に永久コレクション多数。著書に「インテリアと日本人」「家具の本」「ともひな文芸社」。「茶室とインテリア」「普通道デザイン」(工作舎)など多数

NEXT SCENEのショールーム、名古屋のショールームよりも進化・深化したプラザグループ。映像とサウンドに心から没入することができる究極のホームシアター専用室

屋に入るにあたって、小さな鼠木戸をくぐっていくんです。それでこっちの世界と異界を分けているんです。

加藤 それは狙っていました。敢えて小さい入り口をつくって、電動ドアにしたんです。押ししたら開くというふうにはしていません。

内田 それは、妙喜庵、待庵の入

り口、にじり口に近いですよね。逃げ出すことができない（笑）。それくらい異界性を高めた空間なんです。

加藤 ——ちよつと、話がいきなり核心に迫っていますが（笑）、その前に加藤さんからコンセプトについてかいつまんでお話をください。要するに映像とサウンドに

心から没入することができる空間をつくりたかったんです。そこに入った瞬間に何か心から変わるような場所が住宅の中にあってもいいのではないか。そう考えると、じゃあ防音はしっかりしようよ。音に関しては外の雑音をシャットアウトすれば、それで十分なわけです。問題は映像です。われわれが

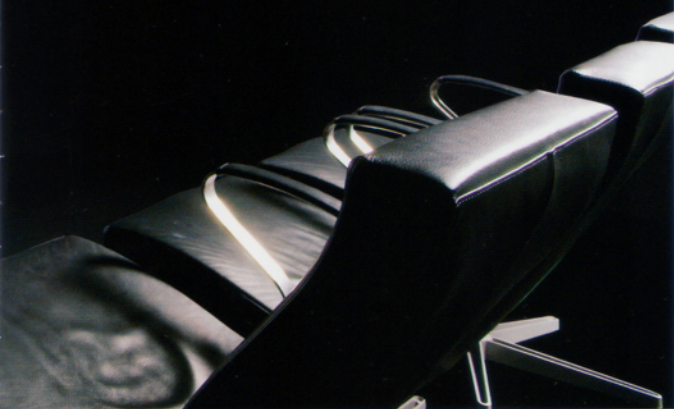
スクリーンで映像を観るといのは、つまり反射光を観ているわけですね。光を観ているわけだから、防音と同じように他の光もシャットアウトしてはなりません。それならば暗闇をつくりこんで、点光源で手もだけを薄ら照らす程度にしてしまおうと思いましたが、何も見えないうような暗闇にしてしまつて、そこに映像が浮かびあがってくる、そんな空間をつくりたい。距離感、広さ、高さ、スペックというものがなくなる空間をつくってみたいわけです。

内田 いま、あなたが言ったこととほとんど同じことを利休が待庵をつつたときに言っているんです。利休は待庵をつつたときに、ホリゾントをなくしているんです。つまり真っ黒の空間にしてしまつた。壁というのは、壁と壁の境で空間の境界が見えます。それを利休は黒く塗つてしまつて空間の境界をなくしてしまつた。写真の撮影スタジオで白塗りのホリゾントがありますよね。あれは水平空間を消しているから、ああいうところで写真を撮ると大きな情景も小さな情景もそのままものが撮れますよね。待庵はそういうものであつて、利休は既に桃山

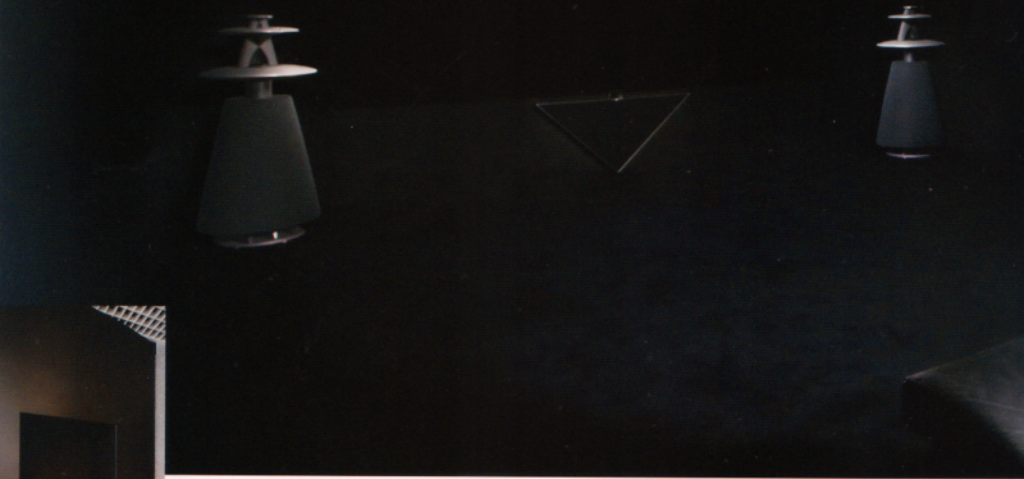
時代にそういつたことを理解して見えないとスケール感がわからなくなる。これも同じですね。待庵は小窓から少しだけ光が入ってくるんですけど、それも同じ感覚です。

少し視点を変えると、たとえば中世のゴシックのカテドラルというのは、ほとんど天井を高くして高いものなんだというのを見せようとしたわけですね。ところがひとつ問題が出てきます。どれだけ天井を高くしても天井は見えてしまふ。つまり、神や天の境界がそこに見えてしまふ。利休はそれを見せなかつたわけです。加藤さんはそれを、いま、ここでやっているわけです。

あなたは十文字美信が京都の仏像を撮つたインスタレーションを見に行ったことはある。真っ暗な空間の中でバックに雨の音とかが流れているんだけど、映像は全然映ってこないんです。だけど、しばらく経つとほんのわずかな映像の光がぼんやりと浮かびあがってきて、5分くらい経つと見えてくるんです。ここに最初に入ってきたとき、それを思い出した



闇のなかに浮かびあがる映像と 漆黒の彼方から聴こえてくるサウンドを 研ぎ澄まされた視覚と聴覚が捉える



内田繁氏が指摘したブラックルームの入り口。「芝居小屋の黒木戸」(待庵の二ノ口)と内田氏が指摘するように、異界への入り口といった設えた(阿部良実撮影)

んだよね。

空間感覚がなくなるというのは、何か自分の居る場所が即ち小宇宙であるみたいな感覚になりますよね。

内田 砂漠とか大草原の感覚に近いんじゃないかな。蒙古なんかだと頼りにするものがないんですよ。声も反響しない。頼るものがないから、空間感覚というか方向感覚がなくなってくる。自分がどこに存在しているのかわからなくなってしまうんです。利休はそれを人工的にやろうとしたんです。自分のいる場所が宇宙につながっているという感覚。

あと、前に夜中、松本市から長野市に移動したことがあるんですけど、ある場所で真っ暗になるんですよ。月も出ていなかったから、本当に暗闇。これが縄文の夜か

、と思います。それは人間にとつて恐怖と、その裏返しで神がそこにいるんじゃないかと、神聖さを感じるんです。

加藤 そういう空間ですと五感が鋭敏になりますよね。

内田 何か見ええないものを見ようと頑張ってしまうんですね(笑)。この空間は気持ちがいい空間です。単に気持ちがいいだけではない。異界だから、どこか怖さがあるんです。だから、生活空間にこういう場所があるというのは珍しいし、おもしろい。何よりもデザインしていないのがいいですね。もちろん、デザインをしているんですが、一切余計な装飾を排しています。余計な手は加えていない。削ぎ落とされています。そのことと自分がデザインだと思います。

NEXT SCENE

〒106-0032
東京都港区六本木5-17-1 AXISビル4F
☎03-3586-6141
<http://www.next-scene.jp/>
営業時間:11:00~19:00
定休日:水曜日



加藤洋一氏
phenumber 081
ホームシアタープロデューサー、NEXT代表。ホームシアター黎明期から活躍し、リビングシアターの提唱者として知られる。また、マルチロン、ホームオートメーション、小く射式カヌー房備など、新たなテクノロジーを先駆的に取り入れてきたことでも知られる